

研究ノート

シャリ（米）

定方 晟

【1】

1998年6月13日、午後9時、TBSテレビで「世界・ふしぎ発見！『ネパール大追跡・謎の偉人ブッダ』」という番組を見た。その中で司会者が、日本語で米を意味するシャリの語源を説明した。「シャリ」はもともと仏の遺骨を意味する。仏の遺骨は尊い。米も同じように尊い。だから、米はシャリと呼ばれるようになった、と。

なるほど仏の遺骨は尊い。米も尊い。しかし、だからといって米が仏の遺骨と同じ名で呼ばれるようになったというのは不自然ではないだろうか。尊いものはいろいろあり、その中で仏の遺骨がえらばれる理由が薄弱であるように思われる。テレビの語源説は真の語源が忘れられたときに生まれた通俗語源にすぎないと考えられる。

米を意味するシャリが仏の遺骨を意味する言葉に由来するという説は私もよく知っていた。しかし、遺骨を意味するシャリがなぜ米を意味するようになったかについては、テレビの解説とは異なる説明を聞いていた。すなわち、米は形がシャリに似ているからシャリと呼ばれるようになった、と。このほうが具体性があり、説得力がある。

私は数日後の大学の授業でテレビの解説の間違いを指摘し、米粒と骨の形態の類似による語源説を紹介した。しかし、骨といえば、頭蓋骨、腕骨、肋骨、骨盤、脛骨などの大きな骨を連想するに違いない学生たちが、米粒が骨に似ているという説明に納得しないだろうと思ったので、解説を加えた。仏が死んだときその遺体は火葬に付されて遺骨は八分され（写真1）、八つの塔（ストゥーパ）に埋葬された。その後、アショーカ王がそれらの骨を掘り起こし、配分しなおし、84000の塔を建てて祀った。だから、骨のひとつひとつは小さな粒のようになったのである、と。

私はテレビの解説がシャリの語源の誤った説明を広げることを危惧して、テレビ局に電話をし、司会者の解説は何によったかを聞いた。局側は利用した資料をファクスで送ってくれた。それは『つい誰かに話したくなる雑学の本』（講談社+α文庫）、日本社、1996年という本の52～53ページであった。著者の名は書いてなかった。

ファクスされたページに「ご飯をなぜしゃりといいうのか」という題があり、その答えがつぎのように書いてあった。

「『しゃり』はインド語の『舍利』からきた。舍利は火葬されたお釈迦様の骨のこと、仏教ではたいへん尊ばれている。仏舍利は輪廻の教えによると、まわりめぐって五穀にもなり、人間を助けるものと考えられた。とくに主食としての米を尊んだ日本では、お米やご飯をこぼしたまま拾わないでいると、仏様の罰があたるといわれた。仏舍利と同じようにお米は尊い。そしてお米は仏舍利の化身である。このような考え方方が、ご飯やお米を『しゃり』と呼ばせるようになった。

日本各地の古いお寺に行くと、舍利骨という小さな骨を、お釈迦様のものとして祭ってある。

それはまるで米粒くらいの、小さな白い粒で、これも仏舍利に米粒のイメージを見た、1つの原因かも知れない。」

この説明を見ると、米粒と骨粒の形態上の類似にもちゃんと言及している。ただし、その言及は二次的であり、説明の力点は両者の尊さの共通性に置かれ、私が知る語源説明から見ると、本末転倒のような印象をうけた。この解説によるかぎり、テレビ番組がシャリの語源として「尊さ共通論」を提示したのもやむをえないと思われた。

私は近くの小僧寿司の店の中で大きく「シャリが自慢」と書かれた文字を見た。店員になぜ米をシャリというか聞いてみた。店員は「寿し文化」という小冊子を見せてくれた。それにはこう書いてあった。「『舍利』とはもともと仏教から来た言葉で、お釈迦様の遺骨のこと。寿しの御飯がその遺骨に似ていたことから『舍利』と呼ばれるようになったという。また『銀舍利』とは戦時中にできた言葉で、食料難の時代に、白い御飯へのあこがれと郷愁を込めて呼んだのが始まり。ほかにも、米をとぐ時にシャリシャリ音がすることから『シャリ』と呼んだという説もある。が、お釈迦様の骨に似ているという説のほうが重みがあるとして、寿し屋で『舍利』と呼んだことが定着したようだ。小僧寿しチーンの舍利も、お釈迦様の遺骨に似たツヤ、美しさを保つよう、舍利炊きにもきめ細かな心配りがされている。」

【2】

さて私に新たな関心が起った。みな「仮の骨に似ている」といっているが、仮の骨を見た日本人がいったい何人いるのだろう。ひとりもいないのではないか。そもそも仮の骨が日本に存在したことすらあるのだろうか。

すでに述べたように仏舍利はアショーカ王によって84000に細分されてインド各地に祀られた。もはや握りこぶし以上の大ささの骨はなくなっただろうと考えるのが自然である。ところがアフガニスタンのハッダには仮頂骨精舎というのがあり、仮頂骨（頭蓋骨）が祀られていたという。このことはインド旅行をした中国の求法僧が伝えている。それは小さな破片などではなく、完全な形に近い頭蓋骨であったらしい。法顯（5世紀）は「骨は黄白色、方円四寸にして、その上は隆起す」（『高僧法顯伝』、大正藏51、p.858c）といい、玄奘（7世紀）は「骨は周り一尺二寸、髪孔は分明で色は黄白」（『大唐西域記』、大正藏51、p.879a-b）といっている。

玄奘によれば、アフガニスタンではカピシの旧王伽藍にも大きさ一寸あまりの仮頂骨が祀られていた（p.875a）。カピシではまたラーフラ僧伽藍のストゥーパと象塗ストゥーパと旧王妃伽藍とにそれぞれ仏舍利一升あまりが祀られていた（p.875a）。仮の遺骨は84000の塔に分祀されたというのに、アフガニスタンにまだ仏舍利が三升以上あったり仮頂骨の大きなのがあったりするのは不審である。

余談であるが私は頼朝の頭蓋骨にまつわる笑い話を思いだす。鎌倉の鶴岡八幡宮の見せ物小屋で説明役の小僧が声を張りあげていた。「さあさあ名宝は左へ、左へ。つぎなるは頼朝公の御しゃれこうべ」。ある客がいった。「おかしいじゃねえか。頼朝公は頭が大きかったというが、これはちいせえ」（頼朝が長頭だったことは有名）。すると小僧がいった。「これは頼朝公おん

とし八才の時のしゃれこうべ」。

カピシのもう1つの旧王伽藍には仏の乳歯が祀られていたというが（p.875a）、嘘をつくにしても、この方がまだ賢い。ちなみに、1998年7月18日の読売新聞によれば、衣川の安倍頼時の遺骨を鑑定したら鯨の骨だったという。

本物かどうかわからぬものが堂々と舎利としてまかり通る古代の仏教世界においては、中国の順礼僧が仏舎利をインドから中国にもたらしたという伝承が生まれても少しも不思議ではない。玄奘は仏舎利150粒を持ち帰ったといわれ（大正蔵51、p.946c）、義淨は300粒を持ち帰ったといわれる（『宋高僧伝』、大正蔵50、p.710b）。

中国の仏舎利については昨年（平成10年）から今年にかけて我が国の各地で開かれている展覧会「唐の女帝・則天武后とその時代展」の展示品「（慶山寺址出土の）舎利瓶及び舎利」（作品番号39）が興味ぶかい。「舎利」が10粒展示されているが、解説には「舎利の小粒はいずれも水晶製とみられる代用品である」とある（写真2）。

わが国に将来された舎利についてはつぎのような記録がある。（法藏館『総合・仏教大辞典』「しゃり」の項、および河田貞「わが国仏舎利容器の祖形とその展開」〔『仏教芸術』188号、1990年1月〕による）。

◎588年に百済王から我が国に仏舎利が献じられ、593年に法興寺の塔に奉納された。

（『日本書記』）

◎大和山田寺に仏舎利8粒。（『上宮聖徳法王帝説』）

◎本薬師寺に3粒。（『七大寺巡礼私記』）

◎鑑真が仏舎利3000粒をもたらした。（『唐大和上東征伝』、大正蔵51、p.993a）

◎719年に法隆寺に5粒。（『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』）

◎空海は80粒を中国からもたらした。

◎円行は3000余粒をもたらした。

◎円仁は菩薩舎利3粒・辟支仏舎利2粒をもたらした。

◎源実朝は宋から仏牙舎利を迎えた。

これらの舎利はいま法隆寺、薬師寺、唐招提寺、東寺、鎌倉円覚寺舎利殿などにあるらしい。舎利を実際に目にした日本人はいたということになる。

だが、それらは本当に仏の遺骨なのであろうか。私はそれを確かめたくて写真を探した。奈良国立博物館編『仏舎利の莊嚴』同朋舎出版（1983）や上掲の『仏教芸術』188号【舎利容器特集号】で写真を見たが、みな容器の写真ばかりで、遺骨の写真はない。研究者たちは舎利そのものには関心がないように見える。

ただし、遺骨とされてはいるが実際には玉の類ではないかと思われるものの写真が『仏舎利の莊嚴』にある（写真3 & 4）。仏光大蔵經編修委員会編『仏光大辞典』（台湾高雄市、1988年初版）3497ページにはつぎのように書いてある。「わが国にあっては至誠によって舎利を感じ得するという記事がたくさんある。『出三蔵記集』巻13によると、康僧會は江東に至って吳王孫權に会ったところ、王に仏法の靈験のことを聞かれ、三七日（=3週間）祈って舎利を感じ得した。王は力士に命じ、鉄槌でそれを打たせたが少しもひびが入らなかった。王は大

いに感服し、ついに建初寺を建てた。・・・（これらは）概して至誠による感得の舍利であつて、仏の真の舍利とはおのずから異なるものである。」

中国や日本で舍利と称されているものの大半はこの類であろう。しかし、近代に入って我が国にもたらされた仏舍利はこれとは同一には論じられない。私はそれを見たいと思った。写真でもいいから見たいと思った。まず名古屋の日泰寺に電話してみた。ここにはタイの国王から贈られた仏舍利が祀られている。

1898年、イギリス人ペッペがインドとネパールの国境線のインド側にある遺丘を掘ったところ複数の壺が見つかった。ある壺には骨の断片が入っており、壺の肩部にはブルーフミー文字で「この仏世尊の舍利容器 (salila-nidhane) はシャカ族のスキティ兄弟が姉妹たち、息子たち、妻たちとともににおこなう寄進である」と書いてあった。これによって遺丘はストゥーパであること、骨はアショーカによって分骨されたもの一部であることが判明した。遺骨はイギリス政府に納められ、イギリス政府はそれを仏教国タイに贈った。タイはそれをスリランカ、ビルマ、日本に分賜した。日本では諸宗派合同でこの遺骨を祀ることになった。遺骨は名古屋のインド風の塔に祀られ、これを管理する寺は日蓮寺と呼ばれることになった。これは日本とシャム（「暹」は「シャム」の音訛語）の友好関係を記念する名である。シャムがタイと改称された現在では寺の名も日泰寺と改称されている。

私は遺骨の写真があるかどうかを日泰寺に尋ねてみた。写真はない、また遺骨は壺に納められて塔中にあり、見ることはできないという返事であった。私は遺骨発見当時のイギリスの学術雑誌に当たってみた。Journal of the Royal Asiatic Society, 1898に発見の記事があった。p.576にペッペは「舍利容器には骨片（複数）が入っている」と書いている。p.578の後ろの図版にはペッペ夫人が素描した壺の内容物20点ほどの絵がある。V.A.スミスがそれらの品を解説しているが、金箔、真珠、紅玉などの小さな装飾品ばかりであって、骨片はない。

私は『望月佛教大辞典』で存在を知った葦名信光『釈尊御遺形奉迎紀要』大日本菩提会本部、1902年という本に当たることにした。それに遺骨の写真があることを期待したのである。この本は国会図書館にマイクロフィッシュの形（請求番号 YDM15016）で保存されていた。

この本は日本の舍利奉迎使節のタイ訪問を生き生きと描き、非常に面白かったが、遺骨の写真はなかった。写真に替る詳しい描写がないかと贈呈式の場面を注意ぶかく読んでみた。タイ側の大臣が挨拶する。その間、金塔の中から一小金塔が出される。大臣はそれを卓子の上におく。日本側が挨拶をおこなう。タイの僧たちは扇を捧げて経を唱える。大臣が金塔を開いて「聖骨の所在を証し、金塔を奉迎正使に授く」（同書30ページ）。「奉迎使、進んでまたこれを拝し、本国より持齋したる宝珠形の仏塔内に納め・・・」（31ページ）。

記事に「聖骨の所在を証し」とある。このとき、奉迎正使は遺骨を目にしたに違いない。しかし、どんなものであったかは述べられていない。

前田奉迎使が帰国後におこなった報告の中につぎの一条がある。「御遺形の形状等に関しては黙契を要する事」。この「黙契」によって遺骨の形状は述べられることなく、写真も残されなかつたのであろうか。

（奈良国立博物館編『仏舍利の莊嚴』<概説>には図2としてヴァイシャーリー塔址から出

土した舍利容器の写真があげられている。骨らしきものが見えるが、説明がないので、骨かどうか確かにない。ヴァイシャーリーは舍利八分の1つが祀られた場所であるので、念のため記しておく。)

私はつぎに東京の読売ランドの仏舍利に期待した。昭和36年2月5日の読売新聞の第1面につぎの見出しと記事（抜粋）がある。

釈迦の遺骨「仏舍利」

セイロン政府から寄贈

読売ランドの『聖地』に安置

「・・・セイロン国政府は・・・ミヒンターレ寺院が尊崇護持する眞の仏舍利を正力読売新聞社主に贈ることになった・・・。この仏舍利は釈迦入滅後はじめて仏教をセイロンにつたえたインドの高僧マヒンダが、父王アソカに請うてセイロンに招来したものといわれている。セイロン国はこれを至上の国宝、眞実の仏舍利として、ミヒンターレ寺院に安置し、日夜国民の礼拝をうけていたものである。」

読売ランドに電話したところ、舍利の写真はないということであった。

私が実際に見た舍利につぎの例がある。1995年に南インドのナーガルジュナコンダ博物館を訪れたとき、館長が館長室のテーブルの引出しから舍利容器を出し、蓋を開けてくれた。容器本体の底に小さな装飾品にまじって米粒大の灰色の小さなもののがいくつか見えた。館長はこれが骨だといった。

また昨年（平成10年）11月には日仏交易株式会社の栗田功氏が氏の事務室で数個の舍利容器を見せてくれた。そのうちのあるものには装飾品にまじって白い骨の断片がいくつかあった。それは米粒よりはるかに大きく、木屑に似ていた。

【3】

シャリの語源に話を戻そう。国語辞典の中には「舍利」の語義の1つとして「米」をあげるだけで、語源の解説をしないものもある。しかし、するのもあり、その場合、形状の類似に言及する点ではほぼ一致している。

大槻文彦『新編大言海』1994年（第1刷、1982年）

西尾実編『岩波国語辞典』第3版（第1版、1963年）

中田祝夫編『古語大辞典』小学館、（第1刷、1983）

金田一春彦編『学研国語大辞典』、1995年（初版、1980年）

『日本国語大辞典』小学館、1980年（第1版、1974年）

佛教辞典ではつぎのものが同様の解説をおこなっている。

中村元監修『新・佛教辞典』誠信書房（第1刷、1962）

岩本裕『日本佛教語辞典』平凡社、1988。

これらの辞典の多くは典拠として空海（774-835）の『秘藏記』のつぎの文をあげる。

「天竺呼米粒為舍利、仏舍利亦似米粒、是故曰舍利也」（大正蔵図像1、p.3a）

（インドでは米粒を舍利という。仏舍利は米粒に似ている。だから舍利という）。

この典拠をあげたひとも読んだひとも、米粒は仏舍利に似ているから舍利と呼ばれると書いてあると錯覚したらしい。実は私もそうだったのである。

ところが次の論文を読んで私は愕然とした。菅原泰典「銀舍利考」「印度学仏教学研究」42-2（1994年3月）。菅原氏によると、米を意味するシャリの語源はインド語の *sāli* である。氏は *sāli* の訳語としてつぎの例をあげる。

「舍利 or 舍利穀」（真諦訳『俱舍論』、大正藏29、223b;182c,189a,190a）

「奢利米 or 奢利稭米」（真諦訳『立世阿毘曇論』、大正藏32、p.200c）

「舍黎」（施護訳『大乗舍黎娑擔摩經』、大正藏16、821b）

「舍理」（礼言編『梵語雜名』、大正藏54、p.1232a）

これらのシャリは明らかに *sāli*（米）の音訳語である。「舍黎娑擔摩經」は *sāli - stamba-sūtra* の音訳であって、意訳では「稻芋經」「稻莖經」などと訳されている。

一方、*sāri* とは別の言葉として *śarīra* があり、これは身体、遺骨を意味し、設利羅、舍利などと音訳される。この音訳語を見るとわかるように、*sāli* と *śarīra* は中国語に音訳されると、ほとんど同じ文字になってしまう。インドでは互いに独立している2つの言葉が、中国や日本では容易に混同されてしまうのである。「梵語雜名」には上記「舍理」の梵語が *sāri*（*sāli* ではなく）と書かれており、ここにも中国における混同化がみられる（『梵語雜名』の異版には *sāli* があるようである。大正藏の注を参照されたい）。インドにおいてもピプラーワの壺の碑文の場合は *śarīra* は *salila* と書かれ、米を意味する *sāli*（*sāli* のパーリ語形）に語形が似ているが、インドでは両語が混同されることはないと思われる。

菅原氏はここで中国の慈恩大師窺規（632-682）の『觀弥勒上生兜率天經贊』の文章をあげる。

「舍利者稻穀也。仏体大小如穀量故以為名」（大正藏38、p.292a）

（舍利とは稻穀のことである。仏の遺体〔遺骨〕は大きさが〔米〕穀の大きさに似て いるのでそのように呼ぶ〔つまり舍利と呼ぶ〕のである）

これは前述の空海の説明と同じである。恐らく空海は窺規が示したような説明を紹介したにすぎないだろう。すると、菅原氏が指摘しているように、われわれは空海の説明を誤解していたことに気がつく。空海の『秘藏記』がいっているのは、「シャリは米を意味する。遺骨をシャリといるのは遺骨の形が米の形に似ているからである」ということである。それは遺骨をシャリと呼ぶ理由の説明であって、米をシャリと呼ぶ理由の説明ではない。現代の辞典類が『秘藏記』からの引用文の全体を米をシャリと呼ぶ理由の説明に当てたとすれば、全くの見当ちがいだったことになる。

それに対し、『秘藏記』からの引用文の前半「天竺呼米粒為舍利」（インドでは米粒を舍利という）だけを取りだせば、これは米をシャリと呼ぶ理由の説明になる。江戸時代や明治大正期の辞典の多くは、まさにそのために『秘藏記』の文を引用したように思われる。そういういた辞典につぎのものがある。

落合直文著、芳賀矢一改修『言泉』1931年（大正10）

上田萬年『大日本国語辞典』1980年（初版、大正4年）

平凡社『大辞典』1980年（初版、1935年）

典拠はあげていないが、シャリがもともと米を意味することを知っていた辞典につぎのものがある。

山田美妙『日本大辞書』1979年（第1版、明治25）

「モト米粒の義」

ところが昭和期の辞典は軒並み、問題の文の全体を米としてのシャリの語源を説明するものと考えてしまつたらしい。そして「仏舍利亦似米粒、是故曰舍利也」（仏舍利は米粒に似ている。だから舍利という）を「米粒亦似仏舍利、是故曰舍利也」（米粒は仏舍利に似ている。だから舍利という）と書いてあるように錯覚したらしい。

だが最近の辞典の中に、シャリ（米）の語源として明確に *sali* をあげるものがあった。つぎの辞典である。

講談社カラー版『日本語大辞典』1995年（初版、1989年）

「(*sali* 梵（米の意）の音写とも) 米または米飯の隱語」

【4】

いつからシャリが米の意で実際に使われるようになったかは定かではない。「時代別国語大辞典・室町時代編」三省堂、1994年「しゃり」の項には遺骨の意味でのこの語の使用例はあげられているが、米の意味での使用例はあげられていない。1603年編纂の日葡辞書にも *Xari* の意として「遺骨」しかあげられていない。

菅原氏は、江戸時代までには広くシャリが米の別称となっていた様子を『桜陰腐談』や『物類称呼』（後者は安永4年刊）から窺うことができるとしている。前者に次の文がある。（この文は『増補俚言集覽』中巻、名著刊行会、1965の365ページにも増補分として載っている。）

客問曰。日域閥左俗呼米粒為舍利。西竺人名何。

答曰。舍利原来米粒之名也。

（「日本の関東では人々は米を舍利と呼んでいる。西方やインドの人は何と呼んでいるか。」

「舍利はもともと米粒の名である。」）

さて、インド語に米を意味するシャリという語があることがわかると、なぜ米粒をシャリと呼ぶようになったかの理由としてもう一つの推測が可能になる。僧侶たちは梵語を知っていることに優越感を抱いていた。だから米を氣取ってシャリ（*sali*）と呼んだ。ちょうど今の日本人が氣取ってライス（rice）というように、と。

しかし、この梵語を知っているからといって、ひとが実際にそれを使ったとするのも推測にすぎない。先に見たように舍利何粒という表現が広く行われていたとすれば、遺骨から米粒への連想が形態の類似を通して行われた可能性は依然として大きい。シャリという語が骨の形との類似から物の呼び名になったと思われる例に、死んで白く固まつたかいこを呼ぶ「しゃり」や、青森県のある海岸に産する白い小石を指すのに使われる「しゃり」がある（後者については、上田萬年『大日本国語辞典』や前田勇編『江戸語大辞典』講談社、1954年などの「しゃり」の項を参照されたい）。

シャリ（米）

先に言及した則天武后展の水晶製の「シャリ」は、写真ではわかりにくいが、実物を見ると半透明で、白く光り、大きさは米粒の半分くらいである。これを見たひとが米粒を連想しても不思議はないほど米粒に似ている。本物のシャリは米粒になぞらえるにはいささか抵抗感があるが、このようなシャリならば、それを米の美称に用いることを思いついた人の心には容易に共感できる。

米は大事なものだから、大事な仏舍利になぞらえてシャリと呼ばれるようになったという考えも一概には退けられない。むかしの日本人には米は貴重なものであったに違いなく、米粒をいとおしむ気持ちからシャリと呼んだことも考えられる。

以上でシャリ（米）の語源についての議論は終わりである。最後に一言。米を意味するシャリについての今日の辞書の説明の成立の背景には二重の誤解があった。インド語で *sāli* と *sarīra* は互いに関係のない言葉なのに、窺規は後者は前者に由来すると考えた。これが第1の誤解である。その窺規の説明を現代の辞典編纂者は米を意味する舍利の語源を説明するものだと考えた。これが第2の誤解である。

※菅原氏はシャリの語源を佛教が入る前の日本に遡らせる議論もおこなっているが、本稿ではそこまでは立ち入らないことにする。



写真1 分舍利図、キジル、東京国立博物館蔵（『仏舍利の莊嚴』図版1）

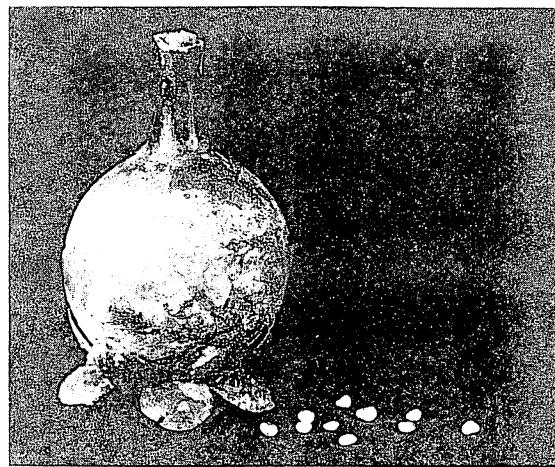


写真2 舍利瓶及び舍利、狭西省慶山寺出土（則天武后展のカタログ、作品39）

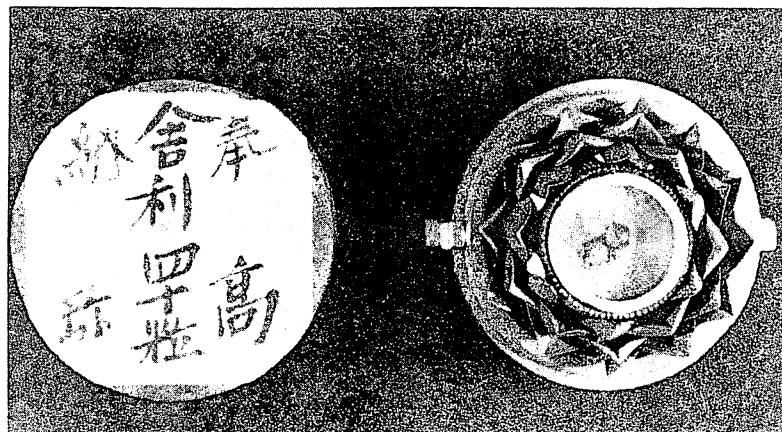


写真3 舍利容器、大和般若寺（『仏舍利の莊嚴』図版7）

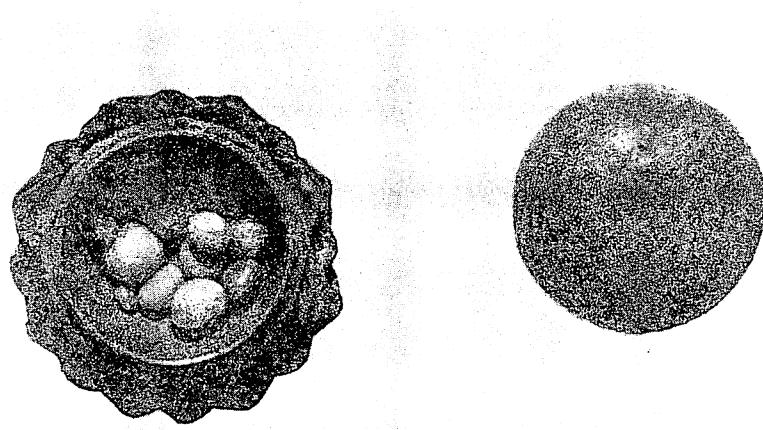


写真4 舍利容器、大和音生寺（『仏舍利の莊嚴』図版11）